清瀬の国立東京療養所東講堂にて

ピリポの伝道（2）

――使徒行伝第８章――

（「活けるキリスト」147号　１９７８年５月号）

１９５７年10月27日

小池辰雄

言動一如　栄光は御名に　御霊の按手　十字架による転換　聖書の縮図　御霊の伝道

【使徒行伝８】

1 サウロは彼の殺さるるを可しとせり。
その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は
皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。2 敬虔なる人々ステパノを葬り、
彼のために大に胸打てり。3 サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出
して獄に付せり。
4 ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、5 ピリポはサマリヤ
の町に下りてキリストの事を伝う。6 群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を
一つにし、謹みて其の語る事どもを聴けり。7 これ多くの人より、之に憑き
たる穢れし霊、大声に叫びて出で、また中風の者と跛者と多く医されたるに
因る。8 この故にその町に大なる歓喜おこれり。
9 ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を
驚かして自ら大なる者と称えたり。10 小より大に至る凡ての人つつしみて之
に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。11 かく謹みて聴けるは、
久しき間その魔術に驚かされし故なり。12 然るにピリポが、神の国とイエス・
キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテス
マを受く。13 シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと
偕に居り、その行う徴と、大なる能力とを見て驚けり。
14 エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、
ペテロとヨハネとを遣したれば、15 彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈
れり。16 これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いま
だ其の一人にだに降らざりしなり。17 ここに二人のもの彼らの上に手を按き
たれば、みな聖霊を受けたり。18 使徒たちの按手によりて其の御霊を与えら
れしを見て、シモン金を持ち来りて言う、19 『わが手を按くすべての人の聖

霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』20ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。21なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。22然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、なんじが心の念あるいは赦されん。23我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』24シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』25かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。

26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』27ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』30ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに黙すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』

34閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』35ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。36途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』37（なし）38乃ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。39彼ら水より上りしとき、主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。40かくてピリポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣伝えつつカイザリヤに到れり。

●言動一如

使徒行伝第８章１節から、

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。

まだパウロではありません、サウロです。己を義としていたサウロですから、殉教の死を遂げたステパノを、つらつら目のあたりに見て、この殺されるを可しとした。

その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は

皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。

この使徒とはペテロ、ヤコブ、ヨハネ等のことでありまして、親しくキリストを受けとったところの御連中ですが、「その他の人々」とは元来ユダヤ教でなく、異邦人でありながら福音を受けた、ギリシヤ語を語る

「ヘレニスト」

と言われている人たちです。今日出てくるピリポという人も「ヘレニスト」でして、使徒行伝の6章の5節に出てくるピリポです。この様な人たちを「ヘレニスト・クリスチャン」というわけです。

2**敬虔（けいけん）なる人々ステパノを葬り、彼のために大に胸打てり。**

この壮烈な、しかし本当の勝利の殉教者ステパノの死を見て胸を打った。

3**サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出（ひきいだ）して獄（ひとや）に付（わた）せり。**

相変らず、パウロの前身たるサウロはいきりたっていた。

4**ここに散らされたる者ども歴巡（へめぐ）りて御言（みことば）を宣（の）べしが、**

御言を「宣べる」「ユーアンゲリゾー」とは「福音する」と言う意味です。

5**ピリポはサマリヤの町に下りて**

多分シケムという町ではないかと思う。

キリストの事を伝う。6**群衆ピリポの行う徴（しるし）を見聞（みきき）して、心を一つにし、謹みて其の語る事どもを聴けり。**7**これ多くの人より、之に憑（つ）きたる穢（けが）れし霊、大声に叫びて出（い）で、また中風の者と跛者（あしなえ）と多く医（いや）されたるに因（よ）る。**8**この故にその町に大（おおい）なる歓喜（よろこび）おこれり。**

正にキリストの御霊と信仰とに満ちたるピリポは、キリストの弟子らしい歩き方をしていた。即ち、

「御言を伝える」

ということと、

「神の力ある恵みの徴がそこに展開していく」

ということとは、いつも使徒たちの言動においては平行している。言動が一如となってそこに展開していく。穢（けが）れし霊すらも、

「御名により出でよ！」

と言えば出て行く。大歓喜の福音ですからね。

●栄光は御名に

9**ここにシモンという人あり、前（さき）にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を驚かして自ら大（おおい）なる者と称（とな）えたり。**

シモンというすこし霊的な不思議な人物がいまして、その魔術で人を驚かす様な業を行っ

ていた。ここで注目しなければならない箇所は、

「**自ら大なる者と称えたり**」

というところです。キリストの使徒たち及び弟子たる私たちクリスチャンは、自から大なる者と称えたら、これはもうクリスチャンではない。即ち、魔術を行う者は、魂においては霊界の消息にはかなり入っている。しかし、霊はキリストの霊の他、その他諸々の霊が有りまして、ヨハネ書簡の中にも、

「**凡ての霊を信ずな、凡てよく弁えよ**」（ヨハネ一４・１）

といっている通り、このシモンは何か別の霊による力を得てやっているわけです。別なということの性格はどういうところに表われているかと言うと、これは、

「**大なる者と称えたり**」

と、霊的傲慢に陥っている。これは偽基督、偽預言者の方向です。サタンがそもそもそれなんだ。サタンは自ら脹れ上がる方ですから。サウロ自身が実は霊的傲慢に陥っていた。サウロのは魔術ではなくて、実存的に正しかった。しかし、その立派さと言うことを誇っていた。即ち、道徳的、宗教的な彼の自分の長所を可としているところが罪なんです。

「**自ら大なる者と称えたり**」

と、所謂教祖的角度ですね。

10 **小より大に至る凡ての人つつしみて之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。** 11 **かく謹みて聴けるは、久しき間その魔術に驚かされし故なり。** 12 **然るにピリポが、神の国とイエス・キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。**

ピリポにおいては自ら大いなる者どころの騒ぎではない。全然反対に、神の国とイエス・キリストの御名あるのみです。人々はこれを受けとった。

13 **シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と、大なる能力とを見て驚けり。**

だから、この霊的なことは下手をすると混乱しますね、

「**シモン又自ら信じ**」

と言うから。しかもバプテスマを受けた。そして、常にピリポと偕にいるから、これは大いに良いと思っていたわけです。また思われていい事態です。彼はバプテスマを受けたが、それは外側からでした。本当に受けている始末ではない。このシモンはピリポが受けている霊とは、同じ霊力でも霊の質が違う。

それでその質はどういうことにおいて見きわめがつくかと言うと――下手をすると他の霊だって病を治しますよ、また不思議な術もしますよ。だから現象面からいうと同じに見える。けれども、質が違う、内容が違う――即ち、そこにおいて立てられているものは、一方はある霊的な力、御利益的な角度でありましょうが、福音は御利益ではない。病が治

るということではない。

「神の国がそこに現ずる」

というわけです。

「イエス・キリストの御名がそこに崇(あが)められる」

というわけです。それから発してくるところの、病が治ることであろうと、それはいいですが、病が治るということが目的となるならば、それはおかしい。コリント前書12章3節にも、

「聖霊に感ぜざれば、誰も『イエスは主なり』と言う能わず」

とあります。

イエスを主キリスト・メシヤ、「膏(あぶら)そそがれたる者」と告白するときに初めてそれが御名ということになる。即ち、私たちにとっては、このイエスは宗教的天才とか何とかいうのではありません。イエスは、

「神の国を自らそこに現じられたもの」

であって、神の国の中心体である。中核である。それがキリストの名の実なんです。私たちにとっては、キリストは何者であるかというと「救主(すくいぬし)」である他、何者でもない。即ち、

「神の栄光の現われ」

であることは同時に

「人間の救い」

であるということです。

私たちの救われんがための福音ではない。神の栄光の現じたものが福音です。神の栄光が現われるということは、同時に私たちが救い上げられること。

「救われる」

ということは、

「神の民とされる」

ということです。その他に救いはない。何か私たちの側が救の目的であるかのように、幸いせられるかの如くだったら、そのうちに信仰は力を無くしておかしくなってしまう。だから、

「神の栄光の顕れんため」

ということが、どこまでも中心ですよ。全然「私」が立っていませんから。凡そ魔術なんていうことは世界が、質が違う。われわれが、

「主イエス・キリスト！」

と祈りの中で本当に呼びまつる時には、

「南無阿弥陀仏！」

と言えば、阿弥陀が自分の中に入ってくるように、自分の中にキリストの栄光が現じて行く。

そしてそれは神様が上の方から実力をもって証しをなさる。その人の実存に現われてくる。それは普通の生活においても勉強においても、仕事においても、病が癒えるという不思議なるわざにおいても、いろいろな面において現われていく。

だから、この使徒行伝の3章においても、ペテロが言っている通り、跛者が立った時に、

「なんぞ我を見つめるか」（使徒行伝3・12）

と言うペテロの答は非常に大事な答です。

「私たちの力でも、経験でも、信仰でもありません。キリストです」

と。自分の信仰が、自分の実存が何ものかと思っていたら、とんでもない間違いです。

「私は何も無いけれども、ナザレのイエス・キリストの名によって歩めといったキリストの名がそこに崇められ、そこに現じて行くことだけだ」

ということ。生れつきの跛者が立ったのも、只それだけなんです。キリストの栄光の現れであって、御利益ではない。その栄光の現われるのを「恵み」と言い、栄光に恵まれると、ますますキリストのものとされていく。これが、ピリポが、

「神の国とイエス・キリストの名」

について宣べ伝えるところです。また私たちの受けとるべき角度だと思います。

●御霊の按手

14 **エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、15 彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。16 これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり。17 ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり。18 使徒たちの按手によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来りて言う、**

エルサレムのペテロ、ヨハネという連中の聖霊における権威というものをここにはっきり現わすためにこのような書き方をしたのだろうと、学者は想像します。このペテロ、ヨハネという使徒たちが明らかに、この

「御霊の按手をした」

という事実は事実なんです。だから、それを端的に受けとって行けばいいと思います。

「彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり」

と。教会においては「按手礼」「按手」と言うことをします。この按手は御霊を本当に受けていなくて、いいかげんな按手をしては勿論いけない。使徒たちの按手はここばかりには限りませんが、御霊が与えられること、これはキリストの贖い、恵み、十字架・復活の事態が説かれて、そして彼らの魂が開かれてきたときに、按手を通し霊が降った。手を按くということは旧約からずっとあるように、福音において厳かな、また大事な事態です。

私たちのような罪びとを通してでも――ペテロだってヨハネだって皆この罪びとです――キリストに本当に身を投げて信じ受けとるときには、この穢（けが）れたる土の器を通して主は働き給う。ですから、御霊は按手によって伝えられて行くということは事実です。そしてある時には異言、霊歌というような現象も起きたりします。

しかし、問題は現象ではない。御霊が本当にそこに臨むということです。この栄光のキリストはいま我々の間に御霊を以て下り、あなたがた一人一人の上に御霊の按手がされつつあるわけです。なるほど、病の状態がある時には良くなったり、悪くなったりいろいろするでしょう。けれども皆さん、体の具合がおかしくなったら、

「自分の信仰がちょっと停滞したかなぁ？」

なんて思うことはないですよ。それは、「自分の信仰」なんて見たらば駄目です。私だって自分の信仰を見て、そいつをバロメーターみたいにグラフなんて書いたらしょうがない。私は自分の信仰のグラフなんて書かない。

信仰の世界は水を割ることは絶対にない。左顧右眄することは絶対にない。信とは絶対なことですから、自分の側の状態の如何に拘らず、どしどし受けとって行っていい。こういう角度になってきたならば、毎日毎日が祈の世界において御霊のバプテスマを受けて進んで行きます。しかしながら、普通のキリスト教会においては、そういうようなことがない。

先程ちょっと、ある教会に行って話をして来ました。そこの教会にはロシヤのモスコー生まれの女の独身のドイツ系のロシヤ人がいまして、51才とか言ってましたが、その人がその教会を牧しているが、そこの学生が私を呼んだのでお話をしてきたが、その婦人は矢張り御霊のクリスチャンでした。そこで私が畳みかけて諄々とお話をしましたが、本当に喜んで受けとってくださった。噫！　矢張りこういう教会もあったのかと。戦争中、ロシヤでは宗教の弾圧がひどく、その時も密かに集会を持って、讃美歌なんか歌えませんから、聖書を静かに読んで静かに祈って終る。そういう集会で、帰る時には一人出てから5分くらい経ってからまた一人出て行く。そうしないと、集会が解ったら大変なことですから。「こんなようなこともしてきた」と聞いて、本当に素晴しい魂だなぁと私は思いました。

しかし、この御霊のクリスチャンは今こそ非常に必要なときなんです。どういう現実がくるか解らない。或いはどういう迫害がくるか解らない。とにかく、どういう現実が来ましても、私たちの中にキリストの御霊が来ていれば、自分の信仰なんて力んでいるのでなく、御霊の主が私たちの中に霊核となり、芥子種一粒と成って生き給うならば、大丈夫、前進できます。勝って勝って行きます。世に勝つ勝利は我らのこの信仰である。我らに賜いたるこのキリストの信が世に勝つ勝利である。

●十字架による転換

18 使徒たちの按手（あんしゅ）によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来（きた）

りて言う、19**『わが手を按くすべての人の聖霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』**

御霊の権威を金で買うなんて、とんでもない了見です。如何にこれがインチキであるかは、この一言にて暴露されてしまう。だから「シモニヤ」と言う言葉はここからきた。聖なるものの売買を「シモニヤ」と言う。ダンテが地獄篇の第19篇で、こいつを罰しています。

****20**ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。**21**なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。**

ペテロは権威を持って語っている。

22然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、悔いなかったら、ごまかしていたら駄目です。**

なんじが心の念あるいは赦されん。23**我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』**

ちゃんと霊にて彼の肉体と霊が如何に禍な状態であるかということを見たわけです。それでシモンは恐れてしまって、

24シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』**

その先はどうなったか知りませんが、悔い改めを、キリストの前に自分の心の方向転換をしなければだめです。その悔改めがどこから来るかというと、十字架を私たちが仰ぐところから来る。私たちは自分でいくら心の方向転換をしたって、そんなことではまた元に戻ってしまう。キリストの十字架の恩寵にぶつかると、私たちの心が、魂がひっくり返える。だが、悔い改めんと欲するのは、求めるのは大切ですよ。

しかし、求めるのはどこで求めるかというと、十字架に来なさい。そうしたならば、私たちの方向転換は十字架というこの軸で回転する。こっち側から、向う側に移される。そうしたならば復活のキリストの方に向かう。十字架の軸でなかったならば回転できない。悔い改めという事は回心ということですから。

「私たちは十字架で贖われました」

と、いくら観念的に想い込んでも駄目ですよ。どこまでも魂の世界は具体的ですから。私たちがこの魂の世界で、心の具体的な方向転換をしなければ駄目です。

私はここに立っています。

「私はこの机の向う側に行きました」

と言ったって、行っていない。私はこう歩いて、そっちに行かなければ、そっちに来たのではない。そのように魂はただ思い込んだって駄目です。魂が本当に魂の世界で歩いて行って、ぶっ倒れて方向転換しなければ駄目です。これはだから、全身的な行ですから、信

即、行と申し上げる。

「厳密に、厳密に」

という概念的な厳密でなく、実に身の行を以て答案を書くような、証しをするような信を持ってください。ところが、シモンはできなかった。

●聖書の縮図

25 **かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。**

26 **然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』**

ところで、ピリポという人は祈りの深い人です。それで主の使に出っくわした。パウロもペテロも良く主の使に出っくわした。ピリポは北のサマリヤの方に向かって行っていた。それなのに今度は180度の方向転換をしてガザに下って往けという。ガザはエルサレムより南南西位の所にある。

27 **ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、**

「カンダケ」というのは女王の抽象名詞です。固有名詞ではない。エジプトの王は「パロ」と言うでしょ、パロも抽象名詞です。「閹人」というのは男性的な機能を奪われた人です。申命記23章1節を読みますと、

「外腎を傷いたる者または玉茎を切りたる者はエホバの会に入るべからず」

とある。だからエホバの会には入れない。エチオピヤの閹人はキリストのことを聞いていたが、悲観していたのでしょう。けれども、願いは切です。その閹人の悲願、これはやはり御使がちゃんと執り成し給うた。そしてピリポはそちらの方に向かわされたわけです。

28 **帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。**

その書を自分で写したかどうか知りませんが、まぁ写したのでしょう、そのイザヤの書を朗読していたから。皆さん一人一人もそういった状景を思い浮かべながら読んでください。

29 **御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』** 30 **ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』**

31 **閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。** 32 **その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに默すがごとく口を開かず。** 33 **卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』**

これはイザヤ書53章のギリシャ語訳から来ているところです。新約聖書からイザヤ書を取り去ったならば、大きな穴があきます。その位、新約聖書にはイザヤ書からの引用が多い。イザヤ書全66章は聖書全66巻の縮図のようなものです。新約聖書は使徒たちがキリストを証言せざるを得ずして証言している。イエス・キリストの死は歴史家は書かない。普通の歴史家はただ一行か二行書いたに過ぎない。パレスチナの一角で十字架の刑を受けて死んでいった。しかしながら死で終らなかった。この一個の存在、神の子、キリスト自身の力が、使徒たちを動かして、証しさせざるを得なかったのがこの新約聖書です。

一切のマイナスを、不義と涙と悲しみと苦しみを彼は担った。私たちのマイナス一切を自分は呑み込んで、聖と義と愛と智慧と力と光とを、その神のプレローマ（充満）の事態を下さるという、この交換を即ち「贖罪」と言う。こんな交換が世の中にあるかと言う。

「贖罪、十字架の恩寵、死より生命へのバプテスマ」

と、ロマ書6章に言っている事態です。

●御霊の伝道

34 **閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』**

この御霊をもって、聖書一巻をもって、私たちも全日本を伝道できなければならない。私たちがこの聖書と、深く聖言と一体となり、聖書が呻き叫んでいる、聖書の中から声が聞こえるような魂にならなければ、この福音の伝道はできない。そして、またこれがあれば聖書一巻をもって日本中を駈け廻ることができる。

35 **ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。**

「イエスという福音体を宣伝う」

と言ったってかまわない。お説教ではない。理屈ではない。御教ではないですよ。どこまでもイエスを伝え、イエスを告白する。

「あなたもイエスを告白するようになりなさい」

という悲願をもって語るわけです。

36 **途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』**

今度はピリポでなく閹人が言った。ピリポから福音を聞いたこの閹人は聞きながら、この福音の中に入りながら、そろそろ御霊のバプテスマを受け始めている。キリストの姿が非常にはっきりして来た。イザヤ書53章は完全に私たちを担いながら逆に、

「お前達も他の人を担い上げて行けるようにしてやるよ」

というのが、これが福音なんです。神の国が展開して行く世界です。神様の栄光が現われて行く世界です。そんな福音にピリポを通して出っくわしたものだから、

「さあ、この水でピリポからバプテスマを受けます」
と。この水のバプテスマはこの閹人にとっては、もう聖霊のバプテスマと等しいものになってきている。悔い改めのバプテスマは聖霊のバプテスマと相接（あい）している。

38 **乃（すなわ）ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。**

ピリポは知らない間に、異邦人伝道をさせられています。一番初めの異邦人伝道はこのピリポです。南のエチオピヤの閹人というような人に、最初にバプテスマを施こしたと言うことは、如何に福音が一切の限界をつき抜けて、例外なく浸透して行くものであるかを示しているわけです。御霊の生命は素晴らしい。

39 **彼ら水より上りしとき、**

ピリポも一緒に入った。浸礼は実際にそういうようにするらしい。形はどうでもいいですが、とにかく水の中に入って水となった。即ち、何の水となったか。ピリポと閹人は聖霊の水となった。

「聖霊が生命の活泉となって湧き出ずる」
といったような、聖霊の水を受けてしまった、この水のバプテスマが。

主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。

この言葉は、はっきりと閹人が聖霊のバプテスマを受け、喜びつつその道に往くことを示している。集会の後はこの、

「喜びつつ進み往けり」

というような魂にならなければ、その集会は本当に受けとっていない。そんな集会は何回やったって無駄ですよ。閹人は深く水の中に浸って、キリストにすっかり贖い潔められて、キリストの生命がやって来ました。そうしたら、

「ピリポを取り去りたれば」

と不思議なことが書いてある。列王記略下2・11～12にエリヤが取り去られた箇所がある。エノクが神と300年生き永らえた後に神に取り去られたこと（創5・24）、ルカ伝24章に復活のキリストがエマオ途上においてやはり姿を消されたことが書いてある。

「取り去られた」
とは、
「栄光に入れられた」
ことです。十字架より復活したキリストは自在に栄光に入らざるを得ないではないか。

ピリポのこの御霊に在って導かれている伝道が如何に復活のキリストと同質的な事態であるかということに、私たちは目を見張らなければならない。彼は肉体を持っています。しかし甦りのキリストの生命を身に体する時はどうですか。未だ聖霊を受けない時のペテ

ロですら湖上を歩いて行った。湖上のキリストを見て

「**変化（へんげ）の者か**」

と弟子たちは懼（おそ）れた。

「**懼るるな我なり**」

と言うキリストに、ペテロは、

「**主よ、貴神（あなた）ならばどうか私をそちらへ行かしめてください**」

「**来（きた）れ**」

と。このキリストの「来れ」という一言にペテロは全身をもって水の上を行った。水を見て溺れるまで主の許に行った。未だ聖霊を受けないペテロでさえ、キリストの御霊の力の「来れ」の一言に引かれて水の上を歩いた。しかし風を見て恐れた。これは分裂ですよ。しかし、風が吹いている、だがよろしい。少し体の調子が悪い、だが結構だ。そういう魂になれる。相対的なものは、

「見えても見えない。聞こえても聞こえない」

と。見えるのは栄光のキリストのみ、聞こえるのはキリストの御声のみ、こうなって来たならば、風が吹いても波が逆まいても、どっこい大丈夫、キリストの許（もと）まで行ける。しかし、風に捉（とら）われたから沈んだ。

「主よ、助け給え！」

と、ペテロが叫んだ。キリストは御手を以て助け上げた。

ピリポに主の霊が本当に臨んだので、ピリポは空中滑走して見えなくなってしまった。私はそのまま、体験はないが、

「然りその通り」

と受けとることができる。使徒行伝の伝道者は素晴らしい伝道者ですね。私たちが今、伝道なんて言ってますが、なんと間の抜けていることだろうかと思う。しかし、間が抜けていたっていいですよ。間の抜けたまま、

「キリストと一つに成る」

というこの一点において、この使徒たちと質的に負けない角度に入っている。

闇人は絶対に他と比較することのできない主の使の執成しによって、イザヤ書53章を地で学んだところに来てしまった。

「**求めよ、さらば与えられん**」

とありますが、主を切に求め、聖霊を与えられたわけです。皆さんは今日この集会においてキリストの生命が確かに入ってきたと私は信じます。どうか使徒行伝を読んでください。この使徒行伝は御霊の行伝ですから、御霊を行伝して行く世界ですから、これを読みながら深く祈っていったならば、私たち自身がピリポとなり、また闇人となって祝福されます。